

平成27年度 第2回滋賀県立琵琶湖博物館協議会

日 時 平成28年(2016年)3月10日(木)

14時～16時53分

場 所 琵琶湖博物館1階セミナー室

会 議 次 第

1 開 会

2 議 事

(1) 琵琶湖博物館中長期基本計画

- ・2015年度第1回琵琶湖博物館協議会でのご意見等について
- ・2015年度行動計画の実績・評価、第3段階の総括について

(2) 新琵琶湖博物館の創造

- ・2015年度第1回琵琶湖博物館協議会でのご意見等について
- ・第1期展示リニューアル等の進捗状況について
- ・広報営業の実績について

(3) その他

- ・2015年度第1回琵琶湖博物館協議会でのご意見等について(その他)
- ・(仮称)開館20周年ありがとう記念事業について(案)

3 閉 会

〔14時00分 開会〕

1 開 会

○司会（浅見副館長）：それでは、定刻になりましたので、ただいまから平成27年度第2回滋賀県立琵琶湖博物館協議会を開催いたします。

本日、司会を担当いたします副館長の浅見でございます。どうぞよろしくお願いたします。

この会議は、恒例でございますけれども、公開で実施をさせていただくことになってございますので、ご了承をいただきたいと思っております。

また、定足数の関係を申し上げますと、きょうは2名の方がご欠席でございます。

松江委員は少しおくれて来られるというご報告をいただいておりますので、委員15名のうち、13名のご出席をいただけるということで、有効に成立しておりますことをご報告申し上げます。

それでは、開会に当たりまして、館長の篠原よりご挨拶申し上げます。

○篠原館長：年度末の大変お忙しいところ、今年度の第2回目の琵琶湖博物館協議会にお越しいただきまして、ありがとうございます。心よりお礼を申し上げます。

ご存じだと思いますけれども、今、私どものほうもリニューアルを抱えていまして、何かばたばたとしております。それで、年度末ということになりました。

当館の本年度の入館者が大体わかってきたんですが、2月末日で33万1,993人でありました。昨年同時期と比べますと、33万5,924人なので、実は第1期リニューアル工事で、C展示室、水族展示室が閉鎖しておりますけれども、それによる減少は3,931人ということで、2つ閉鎖したにもかかわらず、意外とそのまま人数が推移したなと思っております、ほっとしているところであります。

リニューアルは第3期までありますけれども、第1期の展示リニューアルの準備が始まりまして、昨年9月に水族展示室を閉鎖しまして、11月からC展示室全体を閉鎖しました。今、工事が行われていて、大変なほこりの中でしたが、だいぶおさまってきております。

来年度、4月以降ですが、平成28年度に開館20周年を迎えます。それに合わせまして、これもご案内すると思っておりますけれども、7月14日が展示リニューアルオープンということになります。10月22日（土）は開館20周年の記念式典で、国際シンポ

ジウムを行います。それはかなり華々しくやっていきたいと思っております。

11月以降は、「ありがとう交流会」など、市民に開かれた博物館として、そういうイベントも考えていきたいと思っております。展示更新、展示交流空間の再構築など、県民とともに、「新琵琶湖博物館の創造」を目指していこうというふうに考えております。

今日の博物館協議会ですけれども、平成27年度琵琶湖博物館中長期基本計画、第3段階の最終年度を迎えております。本日は、この琵琶湖博物館中長期基本計画の2015年、最終年度の行動計画の実績・評価について、皆様のご意見をいただき、第3段階の中長期基本計画の指標や目標に対しての総評を行っていただこうと考えております。

また、現在、作業を進めていますリニューアルですが、正式名称は「新琵琶湖博物館の創造」ですが、これについて、より具体的な内容を議論していただきますとともに、開館20周年記念事業についてもご意見を頂戴したいと考えております。

以上、今後の博物館のあり方については、大変重要な時期でございます。皆様の貴重なご意見をいただきまして、運営に活かしていきたいと思っておりますので、よろしくご協議願いたいと考えております。よろしくお願いいたします。

○司会（浅見副館長）：それでは、議事に入ります前に、お手元の資料の確認をお願いいたします。

まず、会議次第、それから委員の皆様の名簿と配席図、それから議事に関する資料といたしまして、まず2015年度第1回琵琶湖博物館協議会でのご意見について（中長期行動計画）の二枚物、それからA3の中長期基本計画の活動計画の評価の資料、それからまた前回の協議会のご意見についてということで、今回はリニューアルに関する関係のご意見についてまとめたもの。その次に、カラーの色刷りのリニューアルの工程表が2枚、それから企業訪問活動とか、広報営業課の業績を示す資料が1枚、また前回の協議会をまとめたもので、その他の関係でまとめさせていただいたものが1枚、最後、今年度計画・企画しております、(仮称)開館20周年ありがとう記念事業について(案)をお示ししたものが1枚、それからクリップどめで参考資料がついてございます。

これからの議事進行につきましては、琵琶湖博物館の設置および管理に関する条例に基づきまして、協議会の山西会長様のほうにお願いをいたしたいと思っております。

会長、どうぞよろしくお願いいたします。

○山西会長：それでは、始めさせていただきたいと思います。

もう2週間先には桜の花が咲くというふうに言われているんですけども、きょうはとてもそれが実感できないような寒い日になってしまいました。委員の皆様にはお集りいただきまして、ありがとうございます。

館の皆様には、リニューアルでこんな忙しい最中に、本当は会議どころじゃないのかもかもしれませんけれども、どうもご苦労さまです。

前回は11月に会議をしたばかりで、まだそれほど日がたっていないので、前回の記憶も新しいところだと思いますけれども、7月のリニューアルオープン、さらにその先の展開を見据えながらの会議にしていきたいと思いますので、どうぞよろしく願います。

2 議 事

(1) 琵琶湖博物館中長期基本計画

○山西会長：それでは、議題(1)「琵琶湖博物館中長期基本計画」に入らせていただきます。

琵琶湖博物館中長期基本計画、2015年度行動計画の実績・評価、第3段階の総括について、前回の協議会の内容も含めて、まず事務局のほうからご説明をお願いします。

○事務局(山川課長)：琵琶湖博物館企画調整課長の山川です。本日はよろしく願います。お手元の資料、A4横になりますけれども、前回の第1回の協議会でのご意見を受けて、その後、どのような対応をさせていただいたかというところをご説明させていただきます。

中長期基本計画の今後の展開ということで、協議会での回答としては、現在の中長期基本計画の次に、新琵琶湖博物館創造基本計画というのが現在進行しておりますけれども、その5年間を踏まえながら、2020年、リニューアル以降の新たな行動計画も立てながら策定をしていくということをご回答させていただいております。現行は、リニューアルで新琵琶湖博物館創造基本計画というもののにのっとりやっておりますが、その中の基本計画の中に、研究及び資料の整備のあり方については、もう少し具体的に、詳しく追加する内容を検討しており、今、素案づくりをやっているところです。それにつきましては、また来年度以降の協議会等で審議を諮らせていただきたいと考えており

ます。

また、その中に研究推進として、組織としての仕組みをどのように担保するかというご意見をいただいた上で、研究部自体での代表者会議を通じて、研究時間の確保について、さまざまな手法を講じながらやっていきたい、新たに追加する内容の中に盛り込んでいこうと考えております。

次のページです。教育委員会との連携についてですが、今年度行っておりますヨシ博物館の整備事業について、来年度も引き続き、県の教育委員会、近江八幡市、教育委員会、県立大学、この連携を深めながら、資料の整備だけではなく、人材育成もともに行いながらやっていくという申請を行っているところです。

前回の協議会でのご意見を受けてのその後の対応については、以上です。

それでは、今回ご提示いたします、中長期基本計画の本年度の行動計画の実績及び評価と、第3段階の総括についてご説明させていただきます。

お手元資料のA3の横長です。この表の見方ですが、左側が中長期基本計画の第3段階の目標があり、中央に今年度の行動計画と実績・評価、そして右端が第3段階の総括という形でまとめさせていただいております。

中長期基本計画は、「地域だれでも・どこでも博物館」という目標を実現するために、2002年以降、2015年の間、行動計画を段階的に進めるということでやってきております。

大きく2つのカテゴリーに分けて、「博物館機能の強化」と「環境の整備」という中に、9つの方針を定めており、それについて日々、行動目標・指標等を掲げて実践を積んできたというものです。

今回、「博物館機能の強化」のまず初めとしましては、「資料が活用できる博物館」ということで、今年度は特に、リニューアルに向けての資料の活用を目指したものの行動をやりながら、地域のコレクションや資料の整備を進め、その情報の公開ということを進めてきております。

今年度の実績・評価については、前回の会議のときに中間報告をさせていただいておりますので、それから評価的に変わった点、あるいは新たに実績を積んだというところを中心に説明をさせていただきたいと思っております。

最初のところですが、そこではリニューアルに関する事については、前回はほ

ば達成だったんですが、今回は達成という形で報告させていただいております。

第3段階の総括としましては、これまで5年間で約6万点の登録を行い、総数50万点を超える資料の整備を進めてきております。それらの情報については、ウェブを通して情報の共有化を図りながら、さらに今後、体系化をして公開と利用を促進していくように考えております。ということで、第3段階の評価としては達成、丸という評価をさせていただいております。

2つ目としましては、「研究を進めて活かせる博物館」ということで、評価的にはほぼ達成で、中間報告と同じになっておりますが、7月に国際カワウシンポジウムを開催したり、あるいは今リニューアルで行っております内容に、「田んぼ研究」や「カワウ研究」など、これまでの研究成果を盛り込んだ展示を作成しています。

第3段階の総括としましては、総合的琵琶湖研究の方法論というのを総合研究の中で蓄積させていただきながらやっておりますが、具体的手法の確立というところまで至っていないということです。

ただ、今回、外部資金も確実にとりながら、またバイカル博物館や中国の水生生物研究所との協力協定を延長して、国際的な湖沼企画の研究を今後さらに進めていきたいと考えており、そういった活動も行っているということで、ほぼ達成の丸という評価をさせていただいております。

「博物館機能の強化」の3つ目としましては、「新たな参加と発見ができる博物館」であり、前回から変わったのが、「集う・使う・創る 新空間」での展開が達成、二重丸という評価をさせていただいております。こちらのほうは、現在展示している内容は、同志社小学校の児童の研究成果の発表の場として利用いただいております。来週19日には、児童みずからがプレゼンをするなど、展示室での交流も企画されております。これまでに、コハクチョウの会など、地元で調査研究されている成果についても発表をしていただいております。

表の中央、リニューアル関係につきましては、県政の課題に対して、展示づくりという側面から、県関係機関とのすり合わせ等協議を重ねながら、確実な展示をつくっているところでもあります。また、一番最後のところに、他の機関との連携ということで、企画展示、あるいは鳥丸半島活性化に向けた取り組みの中で、里帰り隕石展示を行ったり、日本の水族展示施設11館と連携して、アユモドキの展示をしたりと、連携を図りながら展示を盛

り立てています。

また、リニューアルの関係のバイカル博物館を通じて、生魚等の資料も確実に供給を受けています。

第3段階の総括としましては、これらの過去5年間の評価は達成、二重丸という形にさせていただいております。特に5年間においては、「琵琶湖のいきものがたり」、あるいは「魚米之郷」「琵琶湖誕生」など、企画展示を実施しておりますが、国内外の博物館や研究機関との連携を強く意識しながらやってきているところです。

4つ目の「体験と交流を促す博物館」ですが、特に学校、地域との連携を深めて、サテライト博物館などを実施しておりましたが、サテライト博物館については今年度をもちまして終了しております。ただ、それで終わるだけではなくて、移動型の展示キットも当館では持っておりますので、それとあわせて今後展開を深めていきたいと思っております。

今年度は、より博物館を利用していただくための仕組みづくりとして、一斉下見でのガイドツアーですとか、あるいはサポートシートを提供するなどの活動は達成できたとさせていただいております。

第3段階の総括としましては、サテライト博物館については、一回展示を行うのに2年間継続してやっており、県内で10カ所展開するとともに、より地域の方と一緒に取り組んだサテライト博物館ができたということで、達成という形に評価をさせていただいております。

最後の5つ目ですけれども、「対話と応援ができる博物館」ということで、こちらは3ページと裏面の4ページにわたっての内容になっております。

「対話と応援ができる博物館」では、フィールドレポーター、あるいははしかけ制度等の充実を図るということで、双方の会員同士が情報の共有化を図るなど、交流会を持ったり、そういったことを重ねながら、会員数をふやしていくという成果が得られており、今年度、達成という形にさせていただいております。特に、はしかけでは、会員同士の交流の場としてのはしかフェを確立したりして、新たにグループができるなどして、19グループが、独自の活動を行われています。それらの交流の輪を広げながら、充実した活動を展開していただいているところです。

また、環境学習については、環境学習センターが中心となって交流会を行うなどして、活動を着実にやってきております。そのほか、企業、大学との連携、また地域との連携と

して、さまざまな活動を展開しているところで、全て達成という形でご報告させていただいております。

最後の一番下の段では、リニューアルに関連して、クイズ形式、あるいは双方向の質問回答システムというものを展開するような展示室づくりを行っており、こちらのほうは、ほぼ達成という見込みで書いております。

これらの活動を通して、第3段階としましては、さまざまな交流活動、あるいはグループごとの交流の場を設けながら、交流自体、活動で情報発信をしながら、地域と博物館を有機的に結ぶ機会が確立できたというふうに評価しております。したがって、達成という形で評価をさせていただいております。

2つ目のカテゴリーですけれども、「環境の整備」で、4つの方針、そして「拠点としての施設整備」ということを掲げております。こちらのほうもIPMを中心とした資料保管管理というものを日々の努力で環境の維持を図っております。その点、ほぼ達成という形に評価をさせていただいております。

また、施設全体の老朽化に対しては、県の施設長寿命化の計画に沿って、当館でも独自の計画策定をしながら、今後、進めていくということで、ほぼ達成という形にさせていただいております。

第3段階の総括としましては、収蔵施設の予算の範囲内ですけれども、日々できることをやりながら、資料保管管理システムを確立させた上で、資料の活用を進めるということをやってきております。

また、施設の老朽化に対する対策については、できる範囲内でできることをやろうということで、ほぼ達成という形にさせていただいております。

2つ目の「柔軟な運営組織」では、リニューアルの体制に沿った技術職員の配置、あるいはリタイアする学芸員もありますので、それに対して新規の採用を試みるなど、今後の運営も踏まえて体制を整えているところです。

第3段階の総括としても、「新琵琶湖博物館の創造」に向けた組織体制の確立を行っているということで、丸とさせていただいております。

4つ目の「社会的支援と新しい経営」については、達成という評価をしております。「倶楽部LBM」につきましては、この後、また詳しい報告をされると思います。前回の11月の時点では、1,500人ぐらいと言っていたのが、現在、2月末で1,600人という

形で、ちょっと伸び悩んでいるところではありますが、「倶楽部LBM」の会員数も着実にふやしていく検討を行っています。

また、リニューアル展示に活用する「琵琶湖のおすすめ風景写真」の募集というのを現在やっておりますが、その公募をさらに呼びかけるために、ギャラリー展示を3月19日から開催する予定で、今、準備を進めているところです。

リニューアルサポーター、メンバーシップ、水槽サポーターなどの外部資金の獲得に向けての営業については、157社、348回訪問したということで、かなりご協力やご理解をいただいているところです。

第3段階の総括としましては、定期的に行っています来館者アンケートについては、来館者満足度85%を常に維持しているという状態で、「倶楽部LBM」でのさらなるサービスを目指してやっていきたいとまとめております。

広報としましては、移動型展示キットを作製した後5年間にわたって、92カ所、総数15万人に閲覧いただいて、博物館の認知度向上を図ってきたということで、達成の二重丸という評価をさせていただいております。

最後の「存在基盤の確立」では、第1期のリニューアルの工事にも着手でき、現在、今年7月のオープンに向けて、日々、頑張っているということで、評価的には達成、丸とさせていただきます。

第3段階の総括としても、来年度20周年を迎えますけれども、「新琵琶湖博物館の創造」実現に向けて取り組みたいと考えており、ほぼ達成というふうにさせていただいております。

速足でご説明しましたので、不備な点はたくさんあるかと思っておりますけれども、この後の質疑応答で聞いていただけたらというふうに思います。

○山西会長：どうもありがとうございます。

とにかく博物館の活動というのは、調査・研究、資料収集・保管・展示、教育普及と、非常に多岐にわたってございまして、そういった多岐な事業展開をこういう形でこちらの博物館は中長期基本計画としてまとめられて、うまくいったところもあれば、課題を抱えているところもあると思いますが、それぞれの評価をしていただいたということでご報告をいただきました。

委員の皆様、それぞれのかかわり方があると思います。ごらんになって、あるいは日ご

ろの活動をごらんになっている中でお感じになっているところ、どなたからでも結構ですので、ご意見、コメントがありましたら、お願いします。あるいは、今の報告についての単純な質問でも結構ですので、どうぞよろしくをお願いします。

上原委員、お願いします。

○上原委員：今の実績・評価を見させていただきまして、達成度がほとんど達成、ほぼ達成、評価が丸や二重丸がとても多くて、素晴らしいことだと思いました。

ただ、人手不足だということをよく聞きます。5ページ目の「柔軟な運営組織」のところで、「学芸職員退職後の補充を順次行う」と書いてありますけれども、これを本当に進めたいと思います。実際、学芸職員さんが足りなくて困っておられる分野があると聞いているのですが、今後、学芸員の配置をもっとしていかれるということはありませんでしょうか。

○山西会長：ありがとうございます。

お願いします。

○篠原館長：もちろんしていきたいなと思っております。5年前に私が就任したときには、一応学芸員の定員は33名ということになっていたんですけども、現在、28名ですので、減っております。ですから、今、退職された方の後の補充は、すぐ採用するようにはしておりますし、それから、今、リニューアルを抱えていますので、一番喫緊の課題に向けて対応できると考えています。通常ですと、この分野がいなくなったので、同じ分野の補充という形になるんですけども、そうではなくて、今一番必要な分野は何かとか、研究型博物館として、この分野はどうしても今必要なんだとか、リニューアルにとって大事なことだということで、喫緊の課題に沿った形での採用というのを手がけています。けれども、これは私どもではどうしようもないところがありまして、33名に戻していただくというのが一番いいんですが、県は財政難で、なかなかそんなわけにはいかないようです。県には働きかけていくわけで、その辺のことについての事情は副館長がよくご存じですので、どういう情勢か、言っていただければと思います。

○浅見副館長：事務のほうの副館長をしております。

もちろん、今、委員がおっしゃっていただいた、本当に応援していただけるご意見、ありがたく頂戴したいと思います。多くの県民の方で、琵琶湖博物館に対するご期待は大変高いものがあると、私ども思いますし、環境学習を初め、人材育成にとって、博物館の果

たすべき役割、あるいはこれまでに貢献したものであるというのは非常に大きいと思います。精いっぱい、しっかりとした体制をつくって、研究も事業も取り組んでもらえるように、学芸員にそういう環境を提供していくのが、私ども管理職の仕事かなと思っております。ただ一方で、県全体の財政事情とか、行政需要は非常に厳しいところがあります。

今、新聞等でもご承知だと思いますが、美術館をこれからつくろうとか、あるいは国体を8年後でしたか、やるときに、実は体育施設が昔の琵琶湖国体の時代からほとんど変わっていないということがあって、これを全部やりかえて、新しい施設をつくらなければいけないということがあるようです。そういうハード施設もさることながら、少子高齢化のこの時代の中で、行政の役割として、対応していかなければならず、行政ニーズは非常に高いわけで、その中でどうやってつくっていくかというのは、知事の方針の中で我々は動いているということでございます。今、33名というお話が館長からございましたが、我々としては、大きな成果を挙げることで理解をしてもらって、よりよい体制づくりに向けて一生懸命やっていくという、姿勢でしかないのかなあと考えております。ただ皆様から、リニューアルに向けてのご期待も大変熱くいただいておりますので、しっかりと受けとめながら、よりよい博物館づくりに、事務も、もちろん学芸員も含めて、努力をしてまいりたいと考えております。

○上原委員：ありがとうございました。

○山西会長：今、皮切りに上原委員のほうから、学芸員の問題について質問をいただいたんですが、この機会に学芸員の配置、あるいは学芸員について、ほかの方、何かございませんか。

どうぞ。水野委員、お願いします。

○水野委員：学芸員の配置の件ですが、それに合わせてなんですけれども。以前、10月末から11月初めぐらいの西武大津でのイベントのときに、たまたま移動博物館を拝見する機会があったんですね。そのときのイベントというのが、赤ちゃんと小学生ぐらいまでのイベントだったんですが、その移動博物館の場所に行っても、ミジンコとかが置いてあるだけで、人もいなく、琵琶湖のシートが張ってあったので、ああ、琵琶湖博物館なのかなというぐらいで、全然琵琶湖博物館というものがわからない状態だったんですね。せっかくするんだったら、そこに一人でも、学芸員じゃなくても、スタッフさんがいて、ちょっとした説明があつたりしたほうがいいんじゃないかなと思いました。

その成果はどんな感じでしたか。そこにあったから、ちょっと来てみたよみたいな成果があったのかどうかというのを教えてほしいなと思ひまして、質問させていただきました。

○事務局（山川課長）：ありがとうございます。移動博物館ですが、確かに今年度につきましてはリニューアルの状況で、本当は手を抜いてはいけないんですが、展示キットの貸し出しという展開をすることが多かったです。集中的に行ったのは、夏休みに東急ハンズさんと手を組みまして、大阪・神戸を中心として、1カ月から2週間のところで移動博を展開しました。それについては毎日人が張りついて、交流を進めながら、ワークショップをして、リニューアルを宣伝するというのもやりました。見ていただいた西武百貨店のほうは、お貸しするというだけで終わってしまったということではございます。

実際、過去3、4年間やってきましたが、大阪でやったときに、実際、集客につながるかの確認として、チラシを配って、そのチラシをご持参いただいたら、割引きしますよというような特典をつけながら実施してみたのですが、1回につき5組も来ないような状況というのが実際のところでした。ただ、ワークショップをして、お客様とのやりとりをしている中では、「あっ、行ったことがあるよ」とか、「今度行ってみようかな」というような、お客様のお声は感じておりますので、地道に進めていけば、また、そういうことは必要があると思うんですが、なかなかそればかりはやってられないというところはございます。

○水野委員：ありがとうございます。たまたまそのイベントが小さな子どもから小学生ぐらいまでが製作をしたり、ちょっと遊べたりというイベントだったので、すごく寂しそうにしていたのがすごく気になったので、多分その期間だけじゃなくて、ずっと置いてあったとは思いますが、そういう何かちょっとしたイベントがあるときだけでも、人がつけられるぐらいの余裕があったらいいかなと思ひました。ありがとうございます。

○山西会長：大変ありがとうございます。おっしゃるとおりだと思います。

ほかに関連したご意見等ございませんか。

津屋委員、お願いします。

○津屋委員：よろしく申し上げます。どうしても学校連携のところになりますので、関係の方にご質問します。

博物館のミッションの中でも教育普及というか、学校連携というのは非常に重要な部分

ですし、琵琶湖博物館20年の中で、相当いろんなノウハウやスキルも向上されていると思います。今の移動博物館においては、近年、挑戦的にされての結果で、一旦そこは区切られて、ある種これからリニューアルしながら、改めて新しい博物館をどう学習の中で活かしていこうかというところでは、いい、新しいスタートになります。そういう意味では戦略的に、学校連携をより強化していただきたいなという思いを込めて、毎回、どちらかというところ、その部分について質問をさせていただきます。

今回、この会議の質問についてのまとめの3ページのところに、私が質問させていただいたところの回答がありますが、私自身が質問した意図というのは、この回答にあるような部分ではなくて、学校の学習の中で、より琵琶湖博物館を利用しやすい形にするために、例えば学習プログラム、この学年にはこういう学習プログラムがあるとか、そういったもっとベーシックなところの質問でした。こういう協議会が組織されたから、もうそれで十分連携していますということではなく、年に数回の会議で、それが有機的に具体化していくなんていうことは到底考えられないので、やはりこれは現場サイドの部分の話になるのかなと思います。

そういった中で、「びわ博っ子」とあえて言わせていただいたのは、相当な実績を持ちながら、8割、9割来てるんだよ、もうびわ博っ子になっていますよというのではなくて、やはりそれを見えるように出していくことが必要だと思います。例えば知事の口から、滋賀県はこれもあるけど、琵琶湖博物館はこれだけ県内の子どもが来てるんだねと言わせていくような、そういった部分が必要ではないかなと。先ほど学芸員の数のこともありましたけれども、よりここにもっと予算をかけてあげようと思わせるには、隠れている宝物の数字はもっと出していただきたいなと思ったわけです。県民誰もが喜ぶのは、やはり子どもたちにとって、これは非常にすばらしいんだというところは、どの世代も応援する要素になるかなと思います。ここで書いてあります8割、9割の小学校の皆さんが琵琶湖博に来ていますと言い切られているこの数字の裏づけというのは、何か明確なリサーチがあるのであれば、ぜひこの数字を教えてくださいなんです。例えば、毎年、県内の学校の何割は来ているとか、8割、9割は必ず来ていると言えるきちんとしたリサーチがあれば、教えてもらって、応援の声を上げたいなと思います。学校単位と親子単位でも数がかめているのか。8割、9割来ているというのは、これはすごい数字だと思います。正直、びわ湖ホールはほとんど知られていないです、子どもたちに。京都の大学で、びわ湖ホー

ルと言っても、ほとんど皆さん、知らなくて、琵琶湖博物館のほうが皆さん、よく知っていらっしやるので、多分すごい数字だと思います。今でなくてもいいですので、帰るまでに教えていただけたらと思います。

心から応援しております。ぜひ、より見える化をしていただきたいです。それで、プログラム集のようなものはぜひつくっていただきたいなと思います。熱きエールで終わってしまいましたが、担当の方の一声だけいただければと思います。

○事務局（大塚）：担当が海外出張で出ておりまして、本日は失礼しています。お伝えしておきたいと思います。手元に確実なデータではないんですが、数字のほうは後で確認させていただきます。

○津屋委員：ありがとうございます。担当の方がいないのに、熱く語ってしまって、残念ではありますが。伝言をお願いいたします。

○浅見副館長：数値はちゃんとっております。団体受付等で受け付けています。

○事務局（大塚）：過去の累積ではなくて、毎年のデータがあるので、それだけここでお示しいたします。

○事務局（水谷）：今対象になっていますのは、小学校、中学校、高校、それから特別支援学校、大学というくりにしております。25年度の入館しています学校、団体数が645校ございます。そのうちの県内の今申しました小中高特大が228校、県外が417校で、県外のほうが多い状況になっております。

それから、児童数ですけれども、合計が5万4,856名で、そのうちの県内が1万5,215名、県外が3万9,641名ということになってございます。

○浅見副館長：比率は今、把握してないですか。

○事務局（水谷）：比率は計算しないと、出ませんので。

○山西会長：とりあえずのご回答ということですね。

前回は教育委員会とのもっとダイレクトな連携ということで、それはなかなか難しい事情があって、関係の環境学習の推進協議会を通じて最大限連携していくという、そういうお話だったんですが、今のご質問は、実際に利用されている学校、団体の利用が非常に多いのであれば、もっとそれをきちっとしたデータの裏づけも明示をしながら、対外的に発信していくべきではないかということで、館側のそういう努力をお求めになった発言だったかと思います。

よろしいでしょうか。

○津屋委員：ありがとうございます。

○山西会長：土井委員、お願いします。

○土井委員：先ほど学芸員の数が33名から28名に減っているというのが現状ですというお話があったかと思うのですが、学芸員は、博物館運営のエンジンになるスタッフだと思います。したがって、設置条例というんですか、定数の規定というのはあるのでしょうか。

○山西会長：これは館長から。

○篠原館長：これはないと思います。減ってきたのは、一つは県全体のいわゆる定数削減というのがあって、28年度までそれを続けるという格好で、ずっと減ってきたんですね。県としては、28年度で一応ストップすると。それで現状維持という格好になります。では、回復するんですかという話になりますが、それは全然見通しはありません。県全体の問題で、あなたの機関は何年に一人ずつという格好でずっとやってきたんですね。私が入ったときも、そういう形で何年間で一人とされてきて、一応は28年度でストップはするということになっていますが、回復はこれから交渉しなくてはならないです。私はそんなに政治力はありませんから、無理かもしれません。

○土井委員：地方自治体がやっている博物館としては、非常に活発な活動をされておりますし、全国的に琵琶湖博物館の存在というのは知られているかと思うんですね。ある意味では、一つの目標というか、モデルで、非常に高いモデルです。そういう中で、だんだんエンジンである学芸員数が減っていくことについては、県のさまざまな事情があるかとは思いますが、非常に危惧する状況かなという気がしまして、何とかその方面を復活させるようにお考えいただければと思います。

○篠原館長：最大限の努力をしたいと思います。率直に実情を言うと、結局減った分だけ、ひとりあたりの仕事量が逆にふえていることになります。それから、今、リニューアルを抱えているので、私としては非常に苦しいことなんですね、皆さんにたくさんの負担をかけてしまっているということもあります。ですから、それを訴える材料にしまして、何とかしたいと常々言っていますけれども、なかなか難しいというのが実情であります。ありがとうございます。応援してください。

○山西会長：頑張ってくださいと思います。

ほかにご意見、ご質問、いかがでしょうか。

北島委員、お願いします。

○北島委員：第1回は欠席させてもらって、申しわけなかったです。

今、学校の話も出ておりますし、どこから来ているかというところで県外が多いので、県外のほうにアピールされた結果として、県内の2倍ぐらい来られているということで、去年の夏には館長さんみずから、近畿の小学校の校長会でご講演いただいて、そういうところも大きかったのかなと思っております、感謝しています。

以前、あるテレビを見ていたら、琵琶湖は滋賀県の面積の6分の1を占めているというので、びっくりしているという、放送がありました。やはり琵琶湖博物館を通じて、滋賀をどんどんアピールする必要があるんじゃないかと思っていますので、みんなのところで働きかけていることが、すごくいいことだなと思いました。

ただ、来館者数でいくと、子どもの数は、国政調査では近畿の中では滋賀だけがふえていましたが、将来的には減少するというので、視点をもっとアジアとかも見据えながら、例えばネットとかをみてどんどん来るところがあるので、ネットを通して、そのよさみたいなものをいろんなところでアピールしていく。国内だけじゃなくて、国外にもアピールするということが必要じゃないかなということを感じています。

その中で資料の4ページの下のところ、「ICTを導入したリニューアル展示として」というところがありますが、今後の研究とかはされるのかなということを思っています。学校現場でも、ICTが推進されて、草津市のほうではタブレットが昨年度は小学校、今年度は中学校で導入されていて、そこでの遠隔での授業であったり、例えば子どもたちが、タブレットを持ってきたら、それで何かアプリでできるとかいうようなところも、また今後研究いただいたらと思います。あくまで私自身は、体験で直接目で見ると触れるということがすごく大切なことだと思っていますが、そういうことも踏まえて考えていただいて、ぜひとも具体化できるといいなと思いましたので、よろしくお願ひしたいと思います。

○山西会長：そういうご要望です。ICTを少し詳しくご説明をお願いしたいと思います。

○事務局（亀田）：今、ICTの導入というのは、リニューアルの展示の中での導入ということを中心に考えております。その中では、学校での授業ということではないんですが、例えば展示室の研究スタジアムというコーナーで、画面上で学芸員の研究成果を見ることができて、それに対して何か質問があれば、その展示室で質問を書き込んで、リアルタイムというのはちょっと難しいんですけども、学芸員がそれに対して返答すると

いうことを考えております。それは展示室の中の活用という形ですが、双方向性のやりとりができるようなことを考えています。

まだ学校の授業とかでの活用というところまでは、まだ具体的には考えておりませんが、ICTのいろんな技術が発達していくことで、いろんな活用が今されているということも考えながら、それも日進月歩、いろんな技術が進んでいく中で取り入れていけたらと思いますので、特に展示だけではなくて、次の第2期工事で交流空間のリニューアルなども考えておりますので、ICTの技術の発展や、学校、その他のいろいろな場所での活用の状況を見ながら、また取り入れていきたいと思います。ありがとうございます。

○山西会長：次のご説明ですね。

○事務局（藤村室長）：海外に向けた広報なんですけど、確かに、今も韓国とか、台湾とか、学生さんが修学旅行で来られています。今後もインバウンドで結構ふえていくかなと思っております。まず博物館でのリニューアル側の体制として、6カ国の音声・文字ガイドを導入することといたしました。これは受け皿としての整備です。海外に対する発信としては、「びわこビジターズビューロー」であったり、滋賀県の姉妹都市である中国湖南省の旅行者に、博物館がリニューアルしますよ、と情報提供するなど働きかけて、こちらにツアーを持ってきていただくような仕掛けを行いつつあります。

ただ、京都・大阪という人気の観光地がありますので、近いことは近いですが、いかに滋賀県まで足を延ばしていただくかというのは、大きな課題かなと思っております。

○山西会長：ありがとうございます。

前半の議題のご説明に対する質疑ですが、だんだん盛り上がってきましたので、どんどんいろいろ出てきそうです。既に話題も多岐にわたっていますが、本来なら、ここで休憩を挟む予定でしたが、今挟んでしまいますと、せっかく盛り上がってきたのが途切れてしまいます。この次の議題の説明、もし今すぐにスタンバイできているのであれば、このまま引き続き説明を受けまして、その後、休憩を挟むようにして、あとはディスカッションに十分時間をとりたいと思います。

○浅見副館長：先ほどの津屋委員のご質問に対するデータのご紹介をさせていただきます。

これは学校が団体利用しているもののみの集計でございますが、県全体の学校数の利用率は、小学校が79%、中学校が23%、高校が39%、特別支援学校が107%、大学が54%、これはいずれも校数でございます。それで、8割、9割と申し上げたのは、ち

よっと口が滑っているかなという感じはしますが、小学校については79%ということでご理解いただきたいと思います。

もう一方で、例えば小学校の子ども会とか、学校ではない団体でもたくさん人が来られています。先ほどご紹介した数字は、それも入っていると思います。それを入れると、全体としてはかなりのボリュームの学校の児童が来ているということは申し上げられるのかなと思います。

詳しい7年間の全体の分析もございますので、またそれは後ほどご提供させていただきます。

○津屋委員：ぜひいただいて帰りますので、よろしくをお願いします。

○山西会長：ありがとうございます。

(2)新琵琶湖博物館の創造

○山西会長：それでは、ディスカッションのほうはここでストップさせていただきまして、リニューアル関係の議題(2)「新琵琶湖博物館の創造」について、事務局のほうからご説明をいただきたいと思います。よろしくをお願いします。

○事務局(藤村室長)：新琵琶湖博物館創造室の藤村です。よろしくをお願いします。座って説明をさせていただきます。

まず最初に、前回の協議会で出ましたご意見に対するその後の対応を説明させていただきます。その後、パワーポイントの準備で、ちょっとだけ時間がかかりますので、その間に休憩をとっていただけたらと思います。

資料のほうは、第1回琵琶湖博物館協議会でのご意見についてということで、右に、(展示リニューアル等)と、括弧書きで書いている資料になります。

まず、聴覚障害の方への配慮で、これはトンネル水槽の音を拾って、外に流すような展示をしていくというお話の中でご意見が出ました。

前回もお答えしましたが、水槽にマイクを仕掛けて、音を拾っているという様子がわかるようにするのとあわせて、先ほど言いました音声ガイド、これは音声・文字ガイドということで、音声と文字でもスマートフォン等で確認できるという、こうしたガイドの充実も図っていきたいと思っております。

次の質問は音声ガイドですが、今回の音声ガイドは視聴覚障害者に配慮した日本語の内

容ということとあわせて、多言語ー中国語が2種類（北京語・台湾語）、韓国語、ポルトガル語、スペイン語という形で対応をしていきたいと思っております。

あと、バリアフリーの関係で、展示の関係でお話しをいただきました。今回、全体のリニューアルとしては、ユニバーサルデザイン評価も行い、誰もが使いやすい展示づくりに努めているところです。

一番下のリニューアルの雰囲気づくりとしてのツールということで、楽しめる雰囲気づくりとしてのパンフレットなどのツールをぜひ考えてほしいということでした。

前回の協議会では、リニューアル広報を専門業者をお願いをしてやっていきますということでしたが、具体的の方針が定まりました。比叡平在住の絵本作家、マヤ・マックスさんを起用して、子どもたちとのワークショップも開催し、そうした要素も発信しつつ、リニューアルを盛り上げていきたいと思っております。

次のページは展示の工夫です。ヨシ原で地面に展示をしたりとか、いろいろな工夫の方法があるのではということ。また、バイカルアザラシの水槽でも、特に琵琶湖というのは周りが山で支えられているということで、植物であったり、樹木のあったり、木の話もたくさん取り入れていくようにという要望でした。

ヨシ原の部分については、ここに書いていますように、ヨシのトンネルをつくって、その場で音であるとか、匂いの展示もしていくことを考えております。この匂い展示については、ヨシの匂い以外に、鮒ずしの匂い、カワウの森の匂い、これは主体となる匂いはカワウの糞になりますけれども、そういった匂いを今、製作者とやりとりをして、サンプルを出していただいて検討しております。

今日、実は、その匂いのサンプルを持ってきておりますので、ちょっと回したいと思えます。これはカワウではなくて、スギ・ヒノキの匂いですので、安心しておかぎになっていただきたいと思えます。上の2つを採用しようかなと思っております。何種類かありますので、回していただきたいと思えます。

また、山の問題については、C展示室の「川から森へ」のコーナーでしっかりと扱っていきたくて考えております。

あと、展示の工夫として、産卵の状況をぜひとも見られるようにということでした。これは何とか頑張ってやっていきたいと思っております。今回、水族の生態展示、カトリヤナの水槽にも季節的に産卵行動が見られるようにしていきたいと思っております。

あと、視聴覚障害者への配慮で、ユニバーサルデザインのワーキングチームで、どのように考えられているのかということですが、何度か検討会を開いて、その結果、音声と文字ガイド、また映像テロップも挿入していくという方針で、現在、展示を進めております。

前回のご意見に対します対応は、以上でございます。

○山西会長：この後、プレゼンですか。

○事務局（藤村室長）：はい。

これから、スイッチを入れますので、会長さん、ちょっと横のほうにお願いします。

○山西会長：では、このタイミングで小休止をとらせていただきます。

今、3時5分ですので、10分間、15分まで休憩とさせていただきます。

（休憩）

○事務局（藤村室長）：それでは、第1期のリニューアル工事の進捗状況をご報告させていただきます。お手元にカラーの工程表がありますが、少し見にくいので、こちらのパワーポイントで説明をさせていただきます。

まず進捗状況です。これまで7月に契約を締結して、8月、12月と、この間に、仕様書であったり、施工図をつくってきました。10月ぐらいから水族展示の解体撤去をスタートし、12月にC展示室の解体撤去を行っております。

今現在は、青い箇所のところにあると思っていただいて結構です。水族展示室は、防水・配管・熱源改修、あともう少し残っております。

展示のでは、水族展示・C展示室ともに、展示の要素図という、これは工事で言う図面に相当する部分ですが、こうした要素図をつくったり、サンプルの作成もしてきました。一部、工場生産に入っているものもあります。でき上がったものは、中間検査もしております。

今後、大体4月から5月にかけて現場設置を行い、大体6月の中旬には設置が終わって、その後、調整・修正作業、そして7月上旬に内覧会を行って、7月14日、リニューアルオープンというスケジュールで、今、頑張っているところです。

先ほど要素図と言いましたが、例えばこれは、最初の導入部の「琵琶湖へ出かけよう」というところの壁面を飾る大型のパネルですが、人のサイズがこんな大きさです。こういうパネルを、工場で作成をしていくということになります。これは田んぼのコーナーの壁

面を飾るグラフィックで、これは20倍スケールのジオラマです。田んぼで起こっている生き物の世界を、人間が入るぐらいの大きさになって見ていただく20倍スケールのジオラマです。こうしたものも作成をいたしました。

現在では、これは3月4日ですが、ヨシ原に実際にすむ生き物、アマガエルとか、ハリネズミですが、実際に手でさわれる展示、触察展示と言いますが、そうした実物を持ってきていただいて検査をしています。

こちらはビワコオオナマズの水槽の出口に展示する、実際に触れる触察展示になりますが、こうしたものもあります。これは豚の皮でつくっているそうです。これは工場で中間検査もやっております。これはバイカルアザラシの水槽の中に入れる氷の床ですね。これは擬氷ですが、これは発砲スチロールで枠をつくりまして、この枠をもとに、FRPで実際に製作をいたします。中間検査も行いました。

こちらはギギの小さな水槽の擬岩になりますが、こうしたものも工場で作っております。こちらは「古代湖の世界」で、こうした金網状のものも擬岩の一部として使っていきます。

C展示室は3月1日の状態をご紹介します。前回の博物館協議会は11月10日でしたが、その前日にC展示室が閉室されました。したがって、その時点ではC展示室はまだ何の変化もない、そうした状況でしたが、その後、解体撤去が行われました。しかし、この解体撤去以後はまだ大きな動きがないというのが実情です。

それでは、ちょっと中を見ていただきます。

これは琵琶湖の航空写真です。空から見た琵琶湖があるC展示室の前室の部分になります。この航空写真の展示は、そのまま使いたいということで、このように養生をしている段階です。

中に入ってみますと、これは古民家の富江家ですね。これは貴重な展示ですので、そのまま継続的に使いたいということで、ブルーシートを敷いて養生していますが、ちょっと上のほうが白っぽい状態で、粉塵がたまっている、こういう状況です。

前回の博物館協議会から1カ月後、12月8日は解体がかなり進んでいる状態で、資料・標本等の展示物は収蔵庫に移動して、使わない側の部分の構造物を解体いたしました。

これが3月1日になりますと、すっかりきれいに、廃棄物が撤去された状態ですが、まだがらんとした状態です。床には板があります。これは壁に取りつける壁用のボードであ

ったり、またこれは骨材で展示室の壁をつくっていくフレーム、これは展示室の仕切りをつくっていく鉄骨、こうしたものが置かれている状態が3月1日の状態です。

床を見ていただきますと、ちょっと薄っすらと線が入っていますが、アール（R）状の線ですね。これは墨出しと言いまして、柱を建てる位置とか、床の仕上げ面の位置を決めていく作業をしています。これは鉄骨を建てるための金具になります。また、コンセント、電気の線を出していく位置も決めております。これは3月1日の状況でしたが、実はきのう、写真を撮りました。このように、既に鉄骨が組み立てられている状態になります。

こちらの黒い鉄骨は、「生き物コレクション」の壁面になる予定の鉄骨になります。そして壁面はこのように、先ほどの銀色のフレームをこのように当てて、壁材を張りつけていくと、ここに展示物が出てくる状態になります。

3月下旬にほぼ壁面、展示コーナーの仕切りの壁が完成をしまして、4月から5月にかけて工場で製作されたジオラマであったり、グラフィックパネルなどが取り付けられます。新しい展示室のイメージはこのようになっていきます。

現在の展示室は、こちらの導入部分から、反時計回りにずっと回っていきましたが、新しい展示室は、こちらのほうから時計回りに回っていきます。

まず琵琶湖から上流に上がっていくように、ヨシ原、田んぼ、川、そして森から水源の森まで、一通りずっと見ていく。そして、それぞれの場の環境、生き物、人とのかかわりを紹介し、場と場のつながりも提示をしていきたいと思っております。

一通り琵琶湖地域の環境を見ていただいて、こちらの古民家で過去の資源循環、物質循環の知恵に学び、次代に引き継ぐ環境、琵琶湖について考えていただく。そして、「生き物コレクション」、研究スタジアムを見ていただいて、ここは琵琶湖について紹介するコーナーですが、もう一度琵琶湖について見ていただいて、水族展示に行っていただくという流れになります。

具体的には、「琵琶湖へ出かけよう」は、琵琶湖の全体像を紹介する導入の部分になります。琵琶湖の立体構造や水移動、水質の変化などを紹介し、また普段目にする事の少ない蜃気楼などの物理現象も紹介をしていきます。

これは県民参加型の展示で、県民から琵琶湖の風景を募集して、コメントつきで紹介をするものです。

こちらはヨシ原に入ってみようということで、ヨシ原にわけ入ったときに見える世

界をジオラマで表現をいたします。ヨシのトンネル、カヤネズミの生態展示、またヨシ帯の役割やヨシの利活用など、人とヨシのかかわりについても展示をします。

こちらは田んぼのコーナーで、6月上旬の田んぼを再現して、20倍スケールのジオラマで紹介するものです。

次のコーナーは、「川から森へ」。こちらは琵琶湖と川、川と森を行き来している生き物や人と川のかかわり、また森と生き物と人との関係を紹介するコーナーになります。

「私たちの暮らし」、こちらは現在から1950年代までにさかのぼりまして、私たちの暮らしに変化をもたらした事柄を紹介し、現在と50年前の暮らしをヒントに、来館者が自分の未来の暮らしについて、そのあり方について考えてもらうコーナーになります。

「生き物コレクション」、これは琵琶湖地域の生き物の多様性を、圧倒的な量の標本、剥製などで紹介をします。

そして、最後のコーナーが「これからの琵琶湖」、これは最新の研究成果を紹介するコーナーであり、こちらの「みんなで作るフィールド情報」、このコーナーは地域で活動する人々の紹介も行う予定をしております。

次に、水族展示のほうに行きます。これは3月1日、同じ日に撮影をしました。

こちらが水族展示の入口で、今までは統一的なグレーの壁でしたが、中に入りますと、このように濃い青色、これが水族展示の新しいイメージカラーとなります。こちらのほうはもう既に塗装がされております。

水族展示、一番最初の水槽は内湖・ヨシ原の水槽です。ちょっとまだこんな感じで足場もありますし、見てもよくわかりませんが、外に行ってみますとこういう状態で、既に塗装が終わって、建築工事が終わっています。これから展示工事がスタートしますが、実はこの部分が今回増築した新しい部分で、ここにヨシを植えまして、そしてヨシの茎の下のほうまで水を張って、その間を行き来する魚の姿を見てもらおうと思っております。

完成するとこのような感じになります。ヨシ原という植生帯の重要性を紹介していく展示になります。

次に、トンネル水槽に移ります。トンネル水槽はまだブルーには塗られていません。各水槽はこのようにアクリル板を研磨をしております。曇りが出てきていますので、クリアにしていくという研磨作業も行いました。

前回の博物館協議会では、この水槽の水抜きと、水抜きをしたトンネル水槽、これは上

から見上げたものですが、それをご紹介いたしました、こちらは同じ場所から見た現状です。このように足場が組まれております。これを上から眺めると、幾層にも足場が組まれておりまして、青い色は防水塗装がされております。こちら、塗装を塗っているところと、塗っていないところ、区別がよくわかると思います。

このトンネル水槽が完成をしますと、このように演出照明によって、沖合の雰囲気を出し、水温も冷却化して、ビワマスも入れるという、そうした展示になっていきます。

次に、こちらは、これまではコアユ、そしてここはビワマスの展示でしたが、新しい展示は、こちらに「湖底の生き物たち」ということで、イサザを展示いたします。これまで長期の飼育が困難であったイサザですが、琵琶湖博物館の研究により、長期飼育が可能となりましたので、常設展示でイサザを出していくということと、こちらはコアユのコーナーです。ここは約1,000匹のコアユを入れまして、沖合で群れをなして泳いでいるコアユの姿を再現する水槽になります。

こちらは、「暮らしのなかの魚たち」のコーナーです。固有種を初め、外来種の問題もこちらでは取り上げていきます。水槽はこういうふうに養生して、中が見えませんが、今、中はこのように、先ほどの防水塗装が施されております。

こちらのコーナーの一番端っこ、突き当たりですが、ここは今まで映像機器のあったコーナーです。こちらが川魚屋さんのコーナーになります。琵琶湖の固有種、滋賀の食文化を伝えていく展示になります。

この魚屋さんを右のほうに抜けて行きますと、今度は下流域の魚のコーナーになりまして、前回ちょっとお見せしましたが、これは元、亀池のあったところですけども、はつりの工事をしたと思います。今ではカトリヤナの水槽のほぼ枠ができ上がって、アクリルパネルも入っております。

これが完成すると、このようになります。実際に水流を起こし、その上をジャンプする魚の姿を見ていただきます。

次に、中流域の水槽のコーナーのほうに行きますと、これが中流域の水槽ですが、床面をフラットにし、そしてまたアクリル板を研磨しております。見ていただきますと、結構クリアになっています。こちらはオオサンショウウオがいた水槽です。

そして、今度は上流のほうに行きます。上流への通路、上にありますのが冷温水配管です。今回、改修しました。断熱処理も終わっております。これが3月1日に撮った写真で

すが、きのう、同じ場所で写真を撮りました。このように天井が取り付けられたということで、刻一刻と作業が進んでおります。これは上流の溪流にすむ魚のコーナーで、ここはアマゴ、イワナなどを紹介していきます。

次に、「古代湖の世界」です。世界の古代湖の固有種を紹介し、古代湖としての琵琶湖の価値を発信するコーナーになります。入ってすぐ左側にこういう水槽があります。これは中型の水槽で、今回、輸送しましたバイカル湖の魚をこちらで展示をいたします。養生して中身が見えないと思いますが、今、中では何をしているかということ、擬岩工事をしています。先ほど工場検査で金網みたいなものがあると言いましたが、これは実は擬岩の一部で、このようにモルタルを張りつけて、擬岩をつくります。工場で擬岩をつくって、こちらでセットするタイプと、このように現場で擬岩をつくっていくという、こういう2種類の作業がございます。

こちらはバイカルアザラシの水槽になります。既に大型の亚克力パネル、新調のパネルが設置をされております。この水槽が、今回改修する水槽で、一番大きな水槽となります。

実は、この亚克力パネルは、2月22日に搬入をいたしました。重さ1.6トンです。重さでちょっとここがしなっているのがわかっていただけるかと思いますが、大きくて重い亚克力パネルです。実はこれを人力で運んでおります。下に小さな小さな台車が3台あって、それに載せて、倒れないように、ゆっくりゆっくりと運んでいます。業者が、床の養生を始めたのが9時半、この状態になったのが11時、そこから時間をかけて、水槽まで運んでおります。自動ドアのところがかきわきわで大変でしたが、何とか入って、次の難所がアトリウムに上がる階段で、これはジャッキアップして、特別な台車の上に、またこういう箱を置いて、ずっと動かしていきました。11時からスタートして、水槽まで運べたのが夕方6時ということで、7時間かけて人力でゆっくりゆっくりと運びました。これが翌日、亚克力パネルを取りつけた写真になります。

このバイカルアザラシの水槽が完成すると、このような形で、バイカルアザラシ3頭を飼育いたします。背景には、冬のバイカル湖の景色が描かれて、ここはちょっと見にくいですがけれども、擬氷があります。先ほどの工場検査で中間検査をした擬氷がこちらに設置をされることとなります。

最後のコーナーは、「マイクロアクアリウム」です。ちょっと中を見てみますと、まだ

こんな状態です。実は外で着実に展示物の制作が行われております。今日、ご紹介するのは、成安造形大学とのコラボレーションでつくっているプランクトンのレリーフです。こういうものです。この方は成安造形大学の指導教官でして、学生さんたちがつくっております。

これが完成すると、こうした形になります。この巨大ミジンコのノロも、学生さんたちがつくっております。今日、担当の学芸員が検査に行ってくれたんですが、ほぼ本体とこの手の部分ができ上がっているということで、あと少し細部の調整があるようです。こちらの左側に、さっき言いましたレリーフが設置をされるということになります。

それでは、今回、バイカル湖から魚を持ってきました。そのときの映像がこちらにございますので、紹介をしたいと思います。

(ビデオ上映)

昨年10月5日に、ロシア・バイカル湖から魚が到着したときの映像になります。一昨年9月にバイカル博物館と交流協定を締結しました。その成果になっております。

これは、事前に学芸員をバイカル博物館に派遣をして、魚の輸送方法について説明を行っている光景になります。ビニール袋に水を入れて、酸素を入れて、こうした発砲スチロールに入れて運ぶということです。

3日間の長旅を終えて、早朝に琵琶湖博物館に到着をいたしました。バイカル湖の水温が7度です。博物館の水槽も7度に合わせています。

魚は4つの木箱に入れて運ばれて、さらにその中に4つの段ボールがあり、その中に先ほどの発砲スチロールとビニール袋があります。

着いて初めて行ったのが、水温のチェックです。運ばれてきたときに7度だった温度が12度まで上昇していました。これ以上上がると、魚が生きていけないということで、大変危ない状況でしたが、何とか元気で魚が到着をしてくれました。

魚はすぐに水槽の中に放さずに、このように長い時間をかけて、温度合わせを行っております。水槽の中の温度が7度、ビニール袋の温度が12度ということですので、温度合わせを行いました。

そして、この水槽の中の水は琵琶湖の水、袋の中の水はバイカル湖の水ですので、ゆっくりと時間をかけて混ぜ合わせて、十分に混ざってから、ようやく魚を放すという、こういう作業を時間をかけて行っております。

こうしたバイカル湖の魚ですが、これから飼育方法を研究して、繁殖も試みていきたいと思っております。

それでは、1回目に運ばれてきた魚の紹介をします。

これはハリウスです。グレーリングとも言われますが、カワヒメマス科の魚です。これはバイカル湖でとれる魚の中で、非常に味がよいということで、食用魚の代表になっています。

これはカジカの仲間です。今回持ってきたカジカでは一番大きなものです。バイカル湖で最も多く目にする小魚がカジカで、現在、約30種のカジカが知られておりまして、そのうちほとんどが固有種ということです。今回、いろんな種類のカジカを輸送しております。普通、こうして底のほうで生活をします。これは遊泳性のカジカで、胸鰭が大きく発達をしている。これは種類の違ったものです。

こちらはゴリヤン。コイ科の魚で、アブラハヤ科の仲間です。

そして、これがバイカルヨコエビ。世界に生息する淡水ヨコエビの約1,000種のうち、4分の1がバイカル湖にいたると言われております。そのほとんどは固有種ということです。

これはカジカの仲間ですね。

そして、今回、バイカルアザラシ3頭が仲間入りということで、これ以後2回、バイカル湖から魚を輸送してきまして、またさらに3月21日にも本年度最後の魚の輸送があり、7月14日のリニューアルオープンに備えております。

リニューアルの進捗状況については以上でございます。

引き続き、説明させてもらってよろしいでしょうか。

○山西会長：はい。

○事務局（藤村室長）：あと、もう一つ、広報営業の関係がございますので、先に説明をさせていただきます。

資料がA4一枚の縦長の資料で、カラーの工程表のあとにつけられている資料になります。表のある細かい資料になります。

前回の博物館協議会では、企業訪問の実績について、今回、ご報告をさせていただくということでした。

まず企業訪問活動状況を報告させていただきます。

これは3月9日現在ですが、これまで156社・団体を訪問いたしました。この中に経済団体——商工会議所とか、そうしたものが29団体ありまして、実際、寄附等の協力をお願いしているのが127社になります。

結果は、2番目に書いておりますが、リニューアルサポーターとして27社で、3,166万6,000円、水槽サポーターは6社で35万円、メンバーシップは13社で120万円ということで、合わせて3,321万6,000円という実績になっております。

次に、「倶楽部LBM」の入会状況ですが、上のほうの表で、一般と高校・大学生とに分かれておりますが、一般の計が1,591人、高校・大学生が33人ということで、合計1,624人となります。やはり一番多いのは滋賀県ということで、73.6%、断トツに多いですが、あと京都、大阪と続いております。

滋賀県下では、大津が27.3%、地元草津市が24.5%、そして近隣の守山市、栗東市、野洲市というような形で続いております。

今回、数字が後半伸び悩んでおりますが、これまでは入館料が750円で、この「倶楽部LBM」（年会費1,500円）に入会をすると、会員証とは別に、無料招待券を（1枚）もらえるということで、（入会期間中に2回来館するとして、1回は、）750円で大人2人が行けるというメリットがありました。このメリットは一緒ですが、入館料がC棟、水族が閉室をしていますので、300円に値下げをしていますので、このメリットが薄らいで、割高感が出たということと、閉室の期間中、来館者の数が非常に少ないという、そのダブルの影響で伸び悩んだのではないかと考えております。

ただ、7月14日のリニューアルオープン以後は来館者も増えますし、こうしたメリットも大きくなってくると思いますので、このおくれを何とか取り戻したいと思っております。

以上でございます。

○山西会長：ありがとうございます。

リニューアル関係と広報営業の関係についてもご説明をいただきました。

それでは、ただいまの説明に対して、委員の皆様からのご質問、ご意見を募りたいと思います。

どうぞ、どなたからでも。

山本委員、お願いします。

○山本委員：ちょっと後出しみたいになるんですけども、今度のリニューアルで目玉のところはバイカルアザラシの展示のところだと思っているんですけども、その部分で多分、人がたくさん来られる日があると思います。土日・祝日なんか。私、いろんなところで経験しているんですけども、たくさん人ごみがある、人がばあーっと流れているときは、自分のことで申しわけないんですけども、車椅子はやっぱり近寄りがたいというか、近寄れないんですね。声かけをしても、ちょっと行きにくい。というのは、また外国の方がおられたり、雑踏みたいなものなので、伝わらない。そういう中でやはり、混み合うような展示物のある施設のところには、車椅子マークの、優先みたいなペイントのスペースがあったりするんですけども、後出しで申しわけないんですけども、後からでもできる部分があるのか。何かそういうふうな特別シートみたいな、シルバーシートじゃないんですけども、そういったお考えがあるのかを聞きたいと思います。

○事務局（藤村室長）：特に開館直後の夏休みは、非常に多くのお客さんであふれるかなと思っております。そうした場合は、こちらの展示交流員の配置も考えて、対応をしなければならぬだろうなというのは想定をしていたんですが、今、山本委員がおっしゃった、そういうスペースというか、その表示については、一回研究をさせていただいて、どういった方法でできるかというのを、検討したいと思います。

○山本委員：よろしくお願いします。ちょっと私ごとで申しわけないんですけども、2月に沖縄のほうに行って、沖縄のほうの博物館、沖縄のほうにある水族館などを回らせてもらったんですけども、いかんせん、その時期は春節という、どこかの国の人がいっぱい来られる時期で、ここの博物館にも来てもらえばありがたいんですけども、確かに、5,000人規模の客船で来られているので、午前中に1,000人、午後から2,000人とか、そんな規模で来られていました。その中でやっぱり人気のあるスペースなんかは、そういう方々が流れをつくったりすると、僕らが何ぼつかえても、待っているという習慣がない人もたくさんおられるのか、いつまでたっても見たい展示物には行けない。ましてや、言葉で伝えても、なかなか伝わらないというような状態があって、先ほど言われたように、スペースにペイントするだけじゃなくて、係員の方の誘導という形もやっぱり必要になる部分ではあると思いますので、その辺はありがたいと思います。よろしくお願いします。

○山西会長：よろしくお願いします。

ほかにいかがでしょうか。

津屋委員、お願いします。

○津屋委員：毎度毎度、企業の訪問の数にすごく驚いて、また金額もすごい達成ということで、本当に素晴らしいことだと思います。いろいろご苦勞もあったかと思いますが、基本的にはこういうものは行政で賄ってしまうところを、これだけ桁違いの寄附を集めて、リニューアルをするというのは非常に新しい博物館のあり方の本当に成果だと思います。またこういったところも奥ゆかしくされず、大いに胸を張っていただいて。びっくりするような成果だと思います。本当にお疲れさまだと思います。

あと、先ほど見せていただいた映像がとてもインパクトがすごくて、びわ湖放送か何か番組でされたんですか。これはオリジナルでつくられたんですか。

○事務局（藤村室長）：バイカル湖から来た魚の映像ですか。

○津屋委員：はい。

○事務局（藤村室長）：あれは業者委託でつくっています。

○津屋委員：そうなんですか。あれは、是非いろんなところで放映していただきたいですね。

○事務局（藤村室長）：はい。その入口の大型モニタでも流しております。

○津屋委員：さっき水野委員もおっしゃったけれど、それこそ出かけて行って、いろんな場所でそういったものが見られるといいなと思います。やはりバックヤードというか、裏で何が起きているかとか、それこそ騒然とした、ああいう中から物が作り上げられていくというのは、今しか見ることができなかつたり、それが非常にわくわく感とか、またその努力の様子がストレートに伝わるので、ぜひ県民の多くが見る機会が得られるように、ぜひお願いしたいと思います。

○事務局（藤村室長）：わかりました。

○津屋委員：本当にいい映像で、とてもよくわかりました。ありがとうございました。

○山西会長：中田委員、お願いします。

○中田委員：先ほど回していただいた匂いですが、それぞれに林の中の土の匂いかなとか感じたりして、すごくいいんですけども、スポット的に、その場所に行って匂いを流すのか、どういう方法で流すのかを教えてくださいませんか。さっき、ちょっとこの時期、花粉症的な感じで、それでなくても匂いというのはやはり化学物質ですから、弱い方もいらっしやると思うので、部屋全体で流すのはどうかなと考えましたので、お願いします。

○事務局（藤村室長）：森のコーナーの担当の林学芸員から、説明します。

○事務局（林）：林です。森の担当をさせていただきます。

先ほど回していただいた匂いの展示ですけれども、人工林の展示のコーナーの中で設置を考えています。人工林、スギとかヒノキとかが有名ですけれども、実際もっと身近なスギ・ヒノキの利用とか用途とかを知ってもらいたいというコーナーで、匂いだけではなくて、目の前に実際のスギとヒノキの樹幹のサンプルに触れる、ハンズオンができるサンプルを置いて、その前で匂いに関しては、ふたを開けると、その中の油から匂いがただよってきて、匂いをかげるということになります。なので、かぎたくない人はかがなくてもいいと。

もちろん、今回、匂いのサンプルを回す中で、恐らく一番誰がかいでも害がないというか、いい匂いのものを多分回したと思うのですが、スギとかヒノキの匂いだけじゃなくて、例えば鮎ずしの匂いとか、あとはカワウがたくさんいる森の中の糞の匂いとか、そういういろいろな匂いも考えていますので、かぎたい人がかげるという形をとろうかなと思っています。

○中田委員：ありがとうございます。

○山西会長：中坊委員、どうぞ。

○中坊委員：黙っていようと思ったのですが、魚の映像が出ていましたので。あれを見せていただくというのは非常に楽しみなんですけど、解説板をお書きになりますね。これは私の希望ですが、あの解説板でバイカル魚だけの解説というものをお書きになりますと、見るほうは、あっ、これはバイカル魚か。あっ、そうかというだけで済んでしまうと思うのですね。希望としては、日本の魚と比べてどこがどう違うのか。かなりあれは違いますね。グレーリングというのはちょっと変わったやつで、シベリアの方にしかいないやつで、カジカもそうですけれども、バイカルのカジカってちょっと特殊なんです。科のレベルで日本のものとは違いますので、海のものとも比べて、どうしてバイカルが古代湖でおもしろいのかということと、琵琶湖と比べてどうかという、そのような解説をぜひやってほしい。これはやはり難しいことだと思うんです。ちょっと書いても、一般の人ってわかってこない。これは私の経験からですけれども、こっちがしゃべっていても、きょとんとされていることが多くて、もちろん解説する側の責任はあるのですが、レベルを、高校生、中学生でもわかるような感じで、逆にバイカルを見て日本の魚を見るような、双方

向の観点で書いていただくとありがたいと思うのですね。バイカルだけを目立たせても、恐らく何もわからないと思います。まず、日本の魚とはどういうものかという観点から、ちょっとバイカルの魚を見ていただくというような解説を、これは難しい注文だと思います。日本でできる人は、そんなにいないし、誰ができるかとなると、これも本当に難しいのですが、ご努力をいただいて、魚類の専門家がおられますので。これは強いリクエストで、できたら拝見させていただきますので、楽しみにしております。

○中田委員：すみません、バイカル関係で。やはりバイカルって、すごく大きくて、広い湖で、深いですね、世界一の深さ。それが琵琶湖と大きさとか深さとか比べられるような図を、あそこの近くに出しておいていただきたいというのと、できたらバイカルの自然ですね。映像でもあの近くで流してもらえるとうれしいなと思います。後ろに冬の山とかの絵がありましたけれども、バイカルの冬というと、何十メートルという氷ができますよね。それでいて、上から透明に透き通って見えるというようなことがありますし、バイカルもたしか流れ出る水は、川は少なかったですね。そういうところも琵琶湖と似ているとか、そういうこともしっかり映して、琵琶湖との比較ができるように、これは希望です。ただ、ふーん、バイカルかっていう、皆さん、ほとんど行くことのない湖だと思いますので、比較がしっかりできるように、今なら映像でも何でも流せますし、あのバイカルの広さを感じられるような何か工夫をしていただけたらと思いますので、お願いします。

○山西会長：貴重な指摘だと思います。大きなプレッシャーがかかっていると思いますけれども、今お考えになっているところがありましたら、ご説明をお願いします。

○事務局（桑原センター所長）：水族を担当しています桑原といいます。

中坊委員からのご意見、ありがとうございます。なかなか魚単位で全部やるというのは、これは難しいです、はっきり言って。解説パネルはそんなにたくさんつくれない、先程見ていただいたあのスペースの中で、できるだけ説明しようとしています。

今回、あのコーナーを「古代湖の世界」と変えたのは、やはり琵琶湖は古代湖です、それと対峙して見てもらいたい。今回、リニューアルはC展と水族ですけれども、C展から水族にかけて、当然C展でも古代湖ということ意識しながら、琵琶湖の紹介をしていきます。水族も琵琶湖の紹介をしますが、それを間に入れていけたらいいのですが、今、設備その他の問題でなかなか難しく、あそこを「古代湖の世界」として、バイカ

ル湖を中心にアフリカの大地溝帯にあるタンガニーカ、マラウイ、ヴィクトリア、これの紹介をあわせて、古代湖として琵琶湖との比較を出していきたいと考えています。ちょっと琵琶湖の魚を間に入れるわけにはいかないですが、パネルを出していくことになっています。

中田委員からいただきましたご意見にありましたように、レリーフをつくって、バイカル湖と琵琶湖、両方のレリーフをつくる。深さについては、なかなか同じ比率にはできないのですが、大きさ、比率、そしてそれぞれの諸元というのをあわせて比較ができるようなパネルは出していこうと考えています。

あと、「古代湖の世界」ということで、それだけ紹介をしていますので、「世界の古代湖マップ」という言い方をしていますが、世界中に一体どれだけ古代湖があって、今回、ここで紹介するバイカル湖、アフリカの大地溝帯の湖、これらの違いというのを、風景と数値で出していく。ヴィクトリア湖の水中写真が手に入らなかったのも、出せていないのですが、それぞれの雰囲気の違いというのを感じていただきたいと思っています。

魚の違い、これは琵琶湖も含めて魚がどのように違うのか、湖の中で泳いでいる雰囲気の違いまでも感じていただけたらという想いでつくっております。

今回のリニューアルで特に意識したのは、実は今後、多分いろんなことで新しい情報がいっぱい出てくると思います、これから10年、20年すると、そのときに、その情報を常に取り入れて、リニューアルする、どんどん更新していける形に持っていけたら。それぞれのパネルも、なるべく手軽にというわけにはいきませんが、これまでと違って、もう少し更新しやすい形でやっていこうと思っています。

ですから、今回、とりあえず7月14日のオープンに向けて一通りつくりますが、その中からさらにもっといいアイデアが出れば、それを取り入れて、展示パネルも更新していく、バージョンアップをしていきたいと思っていますので、ご理解をいただければと思います。

○中坊委員：もう1点、すみません。またマニアックなことを申し上げます。雰囲気の展示は確かにいいことなのですが、やっぱりバイカル湖の置かれている動物地理区ってありますね、アルフレッド・ラッセル・ウォレスの動物地理区。そういうものがわかるようにしてほしいなど。アフリカの大地溝帯もそうですし、あれは熱帯区ですし、

旧北区の北のほうなんですよね、バイカルは。琵琶湖というのは旧北区の温帯部と、それから東洋区がかかっていますので、そこら辺のところの動物相の違いというのを、背景だけじゃなくて、中身を示してほしいなど。子どもの動物図鑑というのは、必ず旧北区とか書いてあるんですけれども、あれを提示したウォレスのことなんか、もう忘れてしまっているわけです。19世紀の中でにとつともなく斬新なことを彼は言っているわけで、それが今まで尾を引いているというか、下敷きにして我々は考えていますので、やはり大枠のベースを提示してもらって、小さいことがわかるようにしてほしいというのが希望です。

細かいことから言いますと、きっとわからない。大きいところをぼんと出して、小さいことはぽっぽと出すと、ああ、そういうことなのかというふうになりますし、大きいところを見せずに、小さいことでやると、あっ、ここもこうなのか、ここもこうなのかという、全部個別案件になってしまいますので。そうすると理解というのは余り深まらないのではと、私は思います。そこをぜひお願いしたいと思います。毎回難しい注文ばかりさせてもらって、すみません。

○山西会長：よろしく申し上げます。

ほかにいかがでしょうか。

水野委員、お願いします。

○水野委員：先ほど中坊委員がおっしゃった展示パネル、表示パネル、説明パネル、解説パネルについてなんですが、希望なんですけれども、文字がたくさんあるんじゃなくて、できたら、例えば魚であったら、魚の特徴とそれと似ているもの。琵琶湖なり海の魚なりの何か特徴を誇張したようなイラストのようなものがあれば、目で見てすごくわかりやすいかなと思ったり、もしくはタブレットで同じ種類なり、似たような固有種と近いものが泳いでいる姿が、その場所で目で見て、比べられたら楽しいかなと思います。文字を暗い中で読むのは大変なので、小さな子どもでも大人でもぱっと目で見て、あっ、ここがちょっと違うんだとか、ちょっと間違い探しのような要領で見つけられたら楽しいかなと思うので、ぜひよろしくお願ひいたします。

○山西会長：前回の話でも、パネルにおさまり切らない追加的な情報というのは、スマートフォンとかそういったものを活用して、そちらに放り込んでいくという話もありましたですね。そこら辺、いかがでしょうか。

○事務局（桑原センター所長）：なかなかそこまで余力がなくて、細かいところまでできていないというのは申しわけありません。

水族の場合、極力、文字ばかりではなく、写真なりイラストなりを使って、できるだけ魚をわかりやすいように紹介したパネルをつくっているつもりです。できればはまた見ていただくとして、先ほど室長からもありましたけれども、今、スマートフォンを使った音声ガイドというのを考えています。その中には写真、映像のたぐいも入れられるということで、これはアプリをダウンロードしてもらわないといけません、それは館内でできるようになるはずですので、それを使って補助的に説明していけるようにしていきたいと思います。よろしくをお願いします。

○山西会長：よろしいでしょうか。

○水野委員：楽しみにしています。

○山西会長：土井委員、お願いします。

○土井委員：老婆心からお聞きするんですが、改修水槽が一応4月に完成をして、あく抜き、試運転、生体移動まで、ほぼ2カ月半の期間を設けられておりますが、これは短くはないんでしょうか、大丈夫ですか。

○事務局（桑原センター所長）：水槽自体は、基本的にFRPで完全に防水してしまいますので、これ自体のあく抜きというのは関係なくなります。実質的には、先ほど写真に出ていましたけれども、擬岩をモルタルでつくるところがあります。その分のあく抜きが必要になってきます。これについては、今、あく抜き剤も随分進化してしまっていて、いろいろ出ていますので、どう対処できるかということを考えているところです。大体もとの設計では、あく抜きが1カ月ぐらいと想定しましたが、もう少し短くて済むのではないかと考えています。設備のほうは同時に試運転をしながら、仮で動かしながらということと、魚を入れるときは、もちろんいきなりは入れられませんので、テスト品種を入れて、水槽の状況を確認しながらということにはなります。2カ月あれば、何とかなるのではと思っています。

○山西会長：無事、間に合うことを祈ります。

橋詰委員、お願いします。

○橋詰委員：私、ふだん、自然観察指導員を仕事でもプライベートでもやっています。最近、食育がすごく有名なのですが、木育ということにかかわることが多くて、仕事でも、私の

職場は大きな里山を公園にしたところなので、ヒノキをさわることもしばしばあって、森の中もよく歩きます。先ほどかがせていただいた匂いが、あっ、こういうものがあるんだと思って、興味深くかがせていただいたのですが、ちょっと気になったのが、私もそういうのがとても好きなので、いろいろアロマなんかで匂いをかいでみると、森林の匂いか、ヒノキの匂いかとかというのをいろいろかいでみたら、いや、ちょっと違う、あっ、これもちょっと違う。結局、手を出さないことが多くて、木育を子どもたちとやっているときに、ヒノキを一生懸命紙やすりでこすったり、スギをこすったりしたときに、ちょっとかいでごらんっていう香りに近いなと思いました。というのは、どういうことかということ、材ですね、ヒノキやスギの木の特有の香りだなというふうに感じました。

先ほどおっしゃったスギやヒノキのジオラマ、小さな模型とおっしゃったのは、木の模型でしょうか、それとも森なのかなというのが気になったんです。森に入ったら、幾らくさん生えているヒノキの森でも、なかなかあれと同じ匂いはしなくて、もっと複雑で、何か独特な感じがあるので、これがヒノキの森に入ったら、こんな匂いがするというふうに思わないかなと思ったり、それが1点、お伺いしたいことです。

もう一つは、匂いの記憶というのは五感の中でもかなり長く残るらしくて、自然観察をするときでも、いろんな木の匂いをかいだりすると、あっ、前にこれ、何かかいだことがあるとか言ってくれる子も多くて、本当にすてきだなと思うので、もしできれば、スギやヒノキだけではなくて、里山でよく見るコブシだとか、あとヒサカキなんかとても衝撃的かなと思うので、ああいう香りの展示を、子どもがさわれるようなところできるといいなと思います。そういうことができるのかということをお伺いしたいです。

最後に、香りというのはメンテはどうなるんですか。とても興味深くて、容器に何かを入れるというふうにおっしゃっていましたが、それは永久的なものじゃないと思うので、ずっと交換をされるものなのかなということをお伺いしました。すみません、とても単純な質問ですけれども、お伺いします。

○事務局（林）：ありがとうございます。私、森のコーナーを担当していますけれども、琵琶湖博物館なので、森の展示とかが軽視されているといつも感じているんですが、森も大事だよと勇気づけてくれるコメントなので、非常に心強く思いました。

ご質問ですけれども、匂いに関してはスギとヒノキの樹幹のサンプルとか、そのものの本物を展示します。今回、その幹とかを通して人工林のお話を中心に、コーナーで示

したいので、いろいろなもの、木材、県産材とかをどんどん使っていかななくては、用途としての木材の重要性をそこでは伝えたいという意図があります。林としてのスギ・ヒノキと、木材としてのスギであったり、ヒノキであったりという匂いを再現しようと、今は考えています。

ただ、匂いをつくってもらっている段階で、森の中にいるような草とか土とかの匂いがいいのか、そういう木材の匂いがいいのかというのは、一緒につくらせていただいている調香師さんとか、展示業者の方と一緒にいろいろ考えていて、森の匂いとかもつくってもらったのですが、地味かなと。先ほどかいでもらった中でも、スギとかヒノキの木材の匂いというよりも、森の匂いをつくって再現してみましたみたいな袋もあったのですが、結果的には今回は、木材としての匂いをつくっていこうと思っています。

スギとかヒノキ以外のほかの木の匂いに関しても、もちろんそれは非常に重要なんですけど、同じような形でこういうアロマ的なものを使って匂いを再現するというのは、なかなか難しいです。私としては、つくった匂いはきっかけでしかないと思うのですね。こういうきっかけを通して、博物館の屋外展示にも森はありますし、滋賀県にもいろいろなところに森があるので、そういうところに行ってもらって、ヒサカキであるとか、コブシであるとか、コナラとか、いろいろなものの匂いを体感してもらおうようなきっかけづくりになったらいいかなと捉えています。

そのコーナーの中で、地域の人たちと一緒にいろいろワークショップをやるような県産材の少し大きめの机を配置するのですが、例えばそういうところで、ぜひ一緒にいろんな木の匂いをかいでみようみたいなワークショップとかができれば楽しいのではと、今、考えさせていただきました。

匂いのメンテに関しても、今、展示業者とかと詰めている段階ですが、当然、恒久的なものではないので、定期的な交換が必要になると思います。その辺の頻度とか、そのあたりは今詰めている段階になります。

○山西会長：ありがとうございます。

よろしいでしょうか。

○橋詰委員：とても楽しみです。今、森とおっしゃっていましたが、私も森という言葉を使うのですが、子どもたちの森の体験って実はないということが、最近すごくよくわかってきたんです。よく幼稚園の先生も森に連れて行きたいとおっしゃるけれども、本当

にずっと入れる森というのが全然なくて、多分子どもたちがイメージする森というのは、絵本の中の森だったりとか、公園の中にちょこっとあるような森のイメージだと思うのですね。だから、本当にそのきっかけとなって、一つ一つの木がこんな香りがしたりということがここで体験できて、あっ、森に行きたいと思ってくれて、その周りの森がどんどん整備されていくというのを本当に期待しています。よろしくお願いします。

○山西会長：ほかにいかがでしょうか。

松江委員、お願いします。

○松江委員：これまでいろいろ広報の部分でお話をさせていただいてきたかと思うのですが、こちらの概要版の裏のページのところに、効果的な広報営業活動の展開というようなことが書かれています。これまでお話があったことを要約していただいて、項目で書いていただいているとは思いますが、いよいよオープンまでカウントダウンとなったこの段階で、7月14日に向けて、既にこういうことが広報とかで決まっているよとか、こういうことを事前にやりますよとかいう具体的なスケジュールをもしここで聞かせていただけることができるならば、お教えいただけたらありがたいと思います、いかがでしょうか。

○事務局（藤村室長）：7月14日のオープンに向けて、その後の対応のところでも少しお話をいたしました。絵本作家のマヤ・マックスさんを起用して、子どもたちとのワークショップをやっていくということで、これを一つのきっかけにして広報をしていきたいと思っております。具体的には、主要な駅でのデジタルサイネージを活用した広報であったり、電車の中吊りであったり、また報道機関等への働きかけということで、このリニューアルを発信して、記事なり番組なり、そういうしたものに取り上げていただくということを総合的に実施してやっていきたいと思っております。

また、インターネット、グーグルとか、フェイスブックとか、そうしたもので採用をしていただけるように働きかけたり、多様な手法で展開をしていきたいと思っております。細部については、委託業者と現在詰めている段階ですので、もう少し詳細が決まれば、具体的なお話はさせていただけるかと思っております。

○松江委員：ありがとうございます。

それと、アクセスの向上ということですが、これも以前からこの場所へおいでいただく方の交通の便ということで、たくさんの方においでいただきたい、おいでいただける

という状況の中で、何か改善点というのは具体的に出てきているのでしょうか。

○事務局（藤村室長）：アクセスで一番大きな課題が、バス便が非常に悪いということで、これも年々減少してきているという状況です。ただ、今回リニューアルによって、かなりの来館者の増が見込まれるということで、バス会社のほうにはその点をアピールをして、増便の働きかけをしていきたいというふうに思っております。

それと、湖上交通ですが、これにつきましては今、烏丸半島魅力向上活性化協議会の中で、近江鉄道さんと琵琶湖汽船さんにも入っていただいているんですが、そうした湖上交通の活用もこのリニューアルを機会に検討していただけるように、働きかけていきたいと思っております。

○松江委員：ありがとうございます。

○山西会長：先に、廣畑委員のほうからお願いします。

○廣畑委員：今の松江委員と同じページになるのですが、企業と大学の連携という項目で、この中でたびたび過去からいろいろと俎上にも上がっているのですが、一つはダイジェスト版に書かれている内容ですね。ここで、私、個人的にかもわからないですが、違和感があるのは、3行目に、「資金協力等企業の環境保全活動、CSR（企業の社会的責任）活動の発信」と書いてあるんですね。CSR（企業の社会的責任）活動の発信って、余計なお世話やみたいな感じに受け取れるんですよ。なので、わざわざこういう書き方を何か意図があってされているのかどうかというのをまず伺いたいというのが一つと、もう一つ下の段、企業・大学とのパートナーシップ協定とあるのですが、これは冊子のほうを見ていくと、意図するところはわかるのですが、要はいろんな形で博物館に来てもらったりとか、そういう形で協定を結んでやっていきたいと思いますということもあるのですが、前にも一度お話をさせていただいたんですが、企業のほうに調査活動に出かけていくとか、そういったことも僕はパートナーシップの中に盛り込んでいてもいいんじゃないかなと思います。今、企業のほうは物理的セキュリティというのをチェックしていかないといけないというのが喫緊の課題ということで、どこの企業さんも進められています。そういう中で、部外者を自分のところの敷地内に入れるというのは、極力控えるという傾向が出ています。したがって、そういった形でパートナーシップ協定ということで琵琶湖博物館の学芸員が、こういう形で調査に入ります、それは受け入れますよ、みたいなことをきちっと協定として結んでおけば、いつでもそういうように申請を

かけていけば、企業のほうも受け入れやすく、すごくハードルが下がると思うんですね。要は調査区域の空白地をなくしていくんだということでは、恐らく琵琶湖博物館の学芸員の皆さんにとっても、すごくメリットのある話だと思うのです。そういった方面でもパートナーシップ協定を結んでいくという一つの方法として考えていただければいいんじゃないかなと思います。

以上です。

○山西会長：いかがでしょうか。

○事務局（藤村室長）：先ほどのCSR（企業の社会的責任）活動の発信ということですが、我々の思いとしては、琵琶湖博物館はそもそも湖と人間の共存関係を築く新しい社会を実現していこうという使命のもとに活動を行っておりますが、企業の皆さんもそうしたものに非常に近い理念のもとにCSR活動を行われているということで、ともに同じ方向性を目指してやっていきたいと思います、そうした意図でここは書かせていただいたのですが、こういうご指摘もいただきましたので、表現は考えていきたいと思えます。

それと、企業・大学等とのパートナーシップ協定ですが、おっしゃるように、こうした企業と協定を締結してやっていけると、我々も非常にありがたいかなと思います。現状でも企業さんの工場の敷地内に入って、生物多様性の保全であったり、生き物の調査であったり、そうしたものを協働でやっているというケースはあるのですが、多くの企業はやっぱり部外者が入ってくるということに非常に神経質になっていると思えます。今後どういう方法があるのかというのは、勉強していきたいと思えます。

○山西会長：よろしいですか。

ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

水谷委員、お願いします。

○水谷委員：失礼します。1回目、失礼をさせていただきましたので、ちょっと意見を言うのはやめとこうかなと思いましたが、せっかく来させていただいたので、一言だけ、すみません。

先ほどお話しされたこのパンフレットは一緒だと思うのですが、要約のパンフレットの一番裏に、多様な主体との連携ということで、私、学校関係ですので、そこで学校と

の連携と書いていただいていますので、大変いいかなと思って見えています。先ほども小学生や中学生、たくさん学校に来てもらっているということなんですが、誤解を恐れずに言えば、それは来ているだけではだめだろうと僕は思っています。私も何回も連れて来させていただきましたが、これは学校や人にとって非常に失礼な言い方になりますけれども、入れておけば、あとは勝手に勉強するやろうみたいな、そういう認識がやはり教師にもあるということは知っていただきたいと思います。もう一方、小学校の先生がおられますけれども、どっちかといえば、教師の考え方によると思います。だから、そういう教師をつくるのが先かなと私は考えています。

実は、学校関係を余り言うのはあれですが、非常に学校の抱えている課題は大きくて、たくさんのことをしなければなりません。毎年変わったいろいろなことが出てきます。というのは、私の学校でもやったのですが、がんに関する教育を勉強しなさいということ、がん教育というのをやりました。多分、文科省からまた出てくるとは思いますが、それが毎年毎年出てくるんですね、いろいろな事が。それを毎年毎年やっていたら、たくさんを消化しなければなりません。実は環境教育って、私はもともと理科の教師ですので関心もあって、ずっとやってきたんですが、もうそれをやっているところではないですね。それで、仕方がない、博物館に入れておけば、これで環境教育は終わったと。僕はこういうことを繰り返して、本当にいいのかというのは、つくづく思っています。

では、どうやったら解決するのかということになりますけれども、やはりそのあたりを教育委員会が中心ですが、文科省も関係はありますけれども、僕は考えてもらいたいと思っています。例えばそこに教員のネットワークを構築すると書いていますが、確かにできる教員はいますし、潜在的にもいると思いますが、この忙しさの中で、こんなことが本当にできるのかと僕は思います。

昨今もいろんな課題で新聞をにぎわわせていますが、あのようなリスクを抱えながら、毎日過ごしている教員が、そんなことまでできるかなと。私が若いころは余裕もあって、山を歩いたりとか、教員同士で勉強会をしたりとか、いっぱいやったんですが、今の若い教員はそれもできない状況にあります。何とかそれを助けてやっていただきたい、そういうふうに思います。これはやってもむだだとか、そういうつもりはないのですが、できたら教育委員会ともしっかりとしゃべっていただけたらというのが私の願いです。

以上です。

○山西会長：ありがとうございます。本当におっしゃるとおりだなと思うのですが、いかがでしょう。

館のほうはいかがですか。

○事務局（浅見副館長）：今、先生のほうからお話があったことですが、我々も来てくれているだけでオーケーというのは全然思っていないくて、また先生がおっしゃるように、最近、子どもたち、ここに入っておけば外にも出ないし、安心だということで、極端なことを申しますと、先生の中には一緒に展示を回ったりせずに、アトリウムで休憩されておられるような先生もいないわけではありません。そういうことも、我々としてもこれは問題だなと思っておりますし、一つの解決策としては、今までも取り組んでいます。事前にしっかり下見に来ていただいて、この博物館でどんなことができるか、それから先生方にはどういうふうにして子どもたちに教えていただくことが大事かということをしつかりとご説明をして、それに基づいて回っていただくということを徹底していく、あるいは来ていただける日程の調整とか、そういうことも、館の者が忙しくてプログラムをしつかりとお伝えすることができないようにならないように、事前の日程をしつかりと調整するとか、できるだけ来ていただくことが実になるように取り組んでいかなければならないと思っております。

それから、プログラムの開発にいたしましても、今度新しくC展示室と水族展示が変わりますので、博物館を見ていただくためのプログラムもやはり当然変えていかなければなりません。それについても今、当館には学校の教員の併任発令の職員が2人来ておりまして、その2人が中心になって、学校向けのプログラムを、新しい展示に見合うプログラムの制作に今取り組んでいるところでございます。本当に先生方が忙しいというのはよくよくわかりますが、やはり我々から申し上げていくことは、きちんと申し上げていかなければならないと思っております。

新任教員の研修というのが総合教育センターで営まれます。その研修も、今、委員がおっしゃるように、最近は算数とか、英語とか、国語にすごく比重が置かれていて、理科の新任教員の研修はだんだん減ってきているんですね。理科の研修にずっとここを活用してもらっていたのですが、そのコマ数を減らしたいというお話を頂戴して、いやいや、それはあかんやろうと。せつかく博物館がリニューアルをして、しつかり皆さん

に学んでもらおうとしているのに、それは何とか考え直してほしいということで、我々も事務的にも働きかけ、また先生は先生のルートでも働きかけてもらって、何とか昨年どおりのコマ数が維持できたということもございます。

先生のお立場もわかりつつ、やはり地道にできるだけ博物館をしっかりと活用してもらえようような取り組みを続けていくしかないのかなと思っているところでございます。

何か補足があれば。

○事務局（水谷）：交流担当の水谷といいます。

今ほど新任研修というお話もありましたが、滋賀県教育委員会のほうで教師塾というものもあります。これは大学4年生になれば教員採用試験がありますので、大学の3年生を対象として、将来教師になりたいという学生さんを集めた塾があるのですが、そちらの学生さんも私どもの観察会であるとか、体験学習とか、そういったところに来ていただきながら、学んでいただくということをやっております。

そのほか、サテライト博物館のお話が前段のほうにあったのですが、サテライト博物館といいますのは、企画展示をした後の展示物だとか、そのまま処分するのはもったいないので、それを学校関係の空き教室、少子化になって教室が空いたよというところに持って行きまして、展示して、見てもらおうというようなことをずっとやっておりました。だんだん展示物自体が古くなってきましたし、また長期にわたって展示しているのを短期にしたいという要望もありましたので、移動博物館という形にさせていただいたところですが、2年間という期限を切って、空き教室を使ったサテライト博物館をしていたのですが、そんな中でこちらに併任で来ていただいている先生方が、それぞれのサテライト博物館で展示していただいている学校に出向いて、研修をしたりということを見せていただいております。

時代の流れというのもありますので、だんだんそれも変わってきたのですが、その使っていた展示物も、また学校の先生方に、パネルとか使えるものは使ってくださいというような形でお配りをしているところで、できるだけむだのないような形でやっているという状況もあります。そういうことも含めて、また今後も続けていきたいと思っております。

以上です。

○山西会長：ありがとうございます。現場のほうも随分いろんな努力をされているという

ことがわかりました。

お願いします。

○事務局（山川課長）：すみません、補足ですけれども、C展示室のリニューアルする新しい展示では、先ほどもありました「琵琶湖へ出かけよう」という最初のコーナーのところの内容を詰めていく段階で、こちらに来ております学校の教員の方と、学校の環境教育で扱うような内容というのをどうやって展示に盛り込むのかということで、中身から一緒に議論してつくってきておりますので、そういったところもまた学校で使っていたときに、より使いやすい形で使っていただけるようになるかなと思っております。

○山西会長：さまざまな取り組みをありがとうございます。

水谷委員、よろしいですか。

予定の時刻をもう既に超過しておりますが、皆さん、言い残すことのないように、もしまだほかにもありましたら。

山本委員、どうぞ。

○山本委員：何度も伝えていることなのですが、先ほど他の委員からあった公共交通機関のことでの答えがあったと思うのですが、これから増便をバス会社などをお願いしていく、湖上交通なんかも利用していくということを伝えていただいたのですが、今現在、車椅子に乗っているような人間が、平日と、土曜、祝日、休日、日曜日とは違うとは思いますが、この館に1日に何名ぐらいの輸送が今現在、低床バスが乗り入れられているのか。また、増便してもらうのに当たって、一体どのぐらいの人数が移動可能なのか。私は琵琶湖で動いている船に乗ろうと思っても、断られるんですね。そんな中で、そういうものを利用するとなると、その中でもチェアウォーカー、車椅子に乗っている人間も利用可能にしてもらえるようなアクションを起こしておられるのかというのが質問なのですが。まず初めに、今現在、1日に何名、公共交通機関で車椅子乗りは来て帰ることができるのか、これから先はどのような数を読んでいるのか、お願いしていかれるのか、お聞かせください。

○事務局（藤村室長）：低床バスですが、当然バスの増便をお願いするに当たっては、そうしたことも要望していきたいと思っておりますけれども、今現在、1日に何名の方がバスに乗れるのかという状態までは、正直申しまして、把握はできておりません。船についても、まだどのような湖上交通の便を考えていくという構想というか、その入口の

段階になっておりますので、協議が進んでいく中で、あわせて車椅子の方等にとっても利用のしやすい船便の持っていく方、そうしたものも当然検討していく必要があると思っております。

○山本委員：よろしく申し上げます。

というのは、車椅子に乗っているからって、一人で行動している者ばかりじゃなく、団体でいろいろ利用した場合、スポーツなんかしていると、やはり団体競技になるので、それで移動した場合、他府県へ行った場合は、やはりそういうふうなものが利用できると、物すごくありがたいんです。今回行ってきた沖縄なんかは、モノレールもバスも全て車椅子で、10人、20人、30人が乗っても全部移動できるんですね。そんなのを見ていると、やはりできないことではない。他府県でやっているから、それはお願いできることなので、声を出さないと多分整っていかないと思うので、声を出したいのですが。何が言いたいかというと、これから東京なんかではまた大きな大会、パラリンピック・オリンピックが行われたときに、数多くの国から数多くのいろんな人が来られると思うのですが、2020年の東京パラリンピック・オリンピックが終わったときに、次の年に関西でマスターズの世界選手権が行われるんですね。そこで滋賀県での競技、私が把握しているのはアーチェリーぐらいのものなんですけど、何種類かあるんです。そうなってくると、全世界のほうからやはり競技選手及び家族、いろいろな方が来られると思います。そんな中で、やはり団体で動くときに、ここも紹介したい、ここに来られる中で、やっぱり人数のあるチェアウォーカーなんか来ようと思っても、利用ができないとなると、やはり考えていかなければならない、考えていってほしいということで、リクエストという形で申し上げます。

○山西会長：重要なご指摘をありがとうございます。

津屋委員、どうぞ。

○津屋委員：手短かに申し上げます。

先ほど水谷先生がおっしゃったことはすごく重要なことで、今も北島校長先生とも、まさに2人でうなずいていたのですが、それに対する検討としては、やはりどうしても一方向になってしまうんですね。これだけやっているから、使いなさい、利用しなさいでは、多分、先ほどの廣畑さんがおっしゃったこともそうで、じゃ、連携したい、連携しようとしていても、本当に学校が今何を課題として、先生方はどういう状況なのか、

まず寄り添いながら、本当にそこに対して日々刻々と変わる中で、どうしようという寄り添い方をやはりしていかないと、こんなに立派だから、どうぞといっても、そこは非常に難しい状況にあるというのが現実ですし、企業さんもまた日々変わる中でいろいろされている中で、表現一つで非常にご気分を害されるようなことがあって、そういうすごく繊細なところ、それはやはり寄り添い方がいま一つ甘いところを、今日は逆にご指摘をいただいたのかなと思います。

そういった意味では、子ども連れの方の目線とか、山本委員がおっしゃったこととか、その目線に対して、どれだけやっていくか。みんながみんな同じ立場ではないので、そういったところの外部連携ですね。そのコーディネーションを担う人材育成というのが非常に重要なところにあるかなと思って、最後、非常に大きな投げかけをしていただいたと思います。褒めたり、いろいろあるのですが、すごくそこは重要な提案を水谷校長先生からいただいたかなと思います。

最後、北島先生にかわります。

○北島委員：もう学校のことは一応出たので、それはどこでもそうなのかなと。先ほど言いました学校支援というんですか、来るのはいろんな部局からいっぱい来るんですけども、学校としては、これを使うとメリットがあるというところで、またお話しをしていただけるとありがたいですし、学校教育というのは本当にすぐいろいろ変わってきて、小学校でも英語が入ってきたりとか、読書とか体力コースとか、プログラムが、時間割以上の実数が入って、どうしようかいうところがあるので、助けていただけるとありがたいと思っています。

以上です。

(3) その他

○山西会長：どうもありがとうございます。

それでは、時間もだいぶ過ぎました。まだ事務局のほうから用意されている説明資料があと2枚ほどありますので、手短にご説明をお願いいただけますでしょうか。

○事務局（松田部長）：事業部長の松田でございます。座らせていただいて、時間がございませんので、簡単にご紹介のほうをさせていただきたいと思います。

これは1ページ、2015年11月10日にご意見をいただいた件の、屋外施設の整

備のところでございます。

こちらのほうで要約いたしますと、屋外展示はさまざまな部分をどのようにするのかというご指摘をいただいております。この中で、前回、できるところからやらせていただくと申しあげましたけれども、解説パネルにつきましては、博物館に至るまでのところに設置してありますクイズ形式の解説がございますが、それにつきましては、修繕のほうをさせていただいております。

ほかにつきましては、屋外展示をどうするのかという検討をするグループを立ち上げ、今後どうしていくのかを今検討しているところでございます。

また、第2期リニューアルとの関係もございまして、それを見ながら、今後どうしていくのかというのを検討していきたいと思っております。

それから、博物館は開館して20年がたち、そこには数多くの生き物が生息しております。確かに水路がなくなったことによりまして、水生昆虫等は減少傾向にあるのですが、ほかの生き物がおりますので、そういったものを最大限利用者の方に見ていただけるような工夫を今後してまいりたいと思っております。

それから、実験工房の利用でございますけれども、実験工房のほうは学校団体、昔くらし体験、それからはしかけ等々のイベントでかなり使われておりまして、ここには（記載は）ございませんけれども、50件を超える利用が年間ございます。

ざっとそういったところで、屋外展示につきましては、今後リニューアルを見ながら改善していきたいというふうを考えている次第です。

以上です。

○山西会長：ありがとうございます。屋外については、検討ワーキングも立ち上げられたということで、今後に期待をしてみたいと思っております。

これについて何かご意見、特によろしいですか。

それでは、最後のご説明ですけれども、（仮称）開館20周年ありがとう記念事業について（案）、資料が一枚物になります。ご説明をお願いします。

○事務局（山川課長）：企画調整課長の山川です。

おかげさまをもちまして、来年度開館20周年を迎えることができました。それに対して、これまでの博物館活動を総括し、発信するとともに、展示リニューアルの第1期もオープンしますし、博物館自体、今後どうするのかというところも県民の方々とともに

に考えながら、さらに利用者の方への感謝を伝える機会というのを設けたいと考えております。

簡単ですけれども、関連したイベントとしては、リニューアルに向けての内覧会をしながら、オープニングではきちんとしたセレモニーも開催して、広く広めていきたいと思っております。

また、企画展示のほうは、開館20周年記念として、琵琶湖博物館からの新発見ということで、学芸員だけではなく、フィールドレポーターさんやはしかけさん、それ以外の地域の団体、個人で活動されている方の成果も含めながら、琵琶湖、滋賀、日本、世界といったところのフィールドに分けながら、新発見について展示をしていきたいと思っております。こちらのほうは、リニューアルが7月にオープンしますので、企画展示自体は9月にオープンしたいと思っております。

また、開館20周年記念式典になりますが、こちらのほうは10月22日（土）の午前中に開催したいと思っております。そこで20年間の歩みを紹介しながら、振り返りながら、先を考えていくという形にしたいと思っております。

国際シンポジウムを同日の午後に開催したいと思っております。「世界の中の琵琶湖」ということで、古代湖の琵琶湖の価値や特徴を位置づけながら、「未来湖へ」というタイトルをあえてつけさせていただいておりますが、今後、私たちが琵琶湖を通しながら、将来的な自然との共存関係等を考えていくことをやっていきたいと思っております。こちらのほうは、今回、リニューアルでもお世話になっているバイカル博物館の館長さん、あるいは今後共同研究も含めながら進めたいと思っておりますオフリッド湖等の研究員の方、あるいはこれまでの研究で一緒にやってきた洞庭湖の湿地センターの方々等をお招きして、一緒に議論をしていきたいと思っております。

それから、5つ目ですけれども、ありがとう交流会。これについては、これまでびわ博フェスという形で、お祭りのような形でみんなでやっておりましたが、来年度は20周年ですので、できるだけ大勢の方に参画いただきながら、みんなで体験交流を深めていくという催し物をしたいと思っております。そちらのほうでは、体験交流というのをつなぎながら、食文化交流、それから発表交流という形で演奏会等を当館でやるなど、交流の場を提供していきたいと考えております。

最後に、20年間の記念誌という形で、活動の記録誌をつくりたいと思っております。

以上です。

○山西会長：来年度はリニューアルオープンだけではなくて、20周年ということで、大変盛りだくさんのスケジュールがありまして、今ご紹介していただいたところです。

これについて何かご質問とかございましたら。

よろしいですか。

ぜひ、委員の皆様のご参加もいただきたいと思います。

一応、きょうの議事は以上ですが、今年度の2回目の協議会はこれで終了することになりますが、来年度の協議会に向けて、我々が何か心づもりをしておかなければならないことがありましたら、お願いしたいと思います。

○事務局（山川課長）：最初に、（1）で言いましたように、中長期基本計画のほうが終わりましたしまして、「新琵琶湖博物館創造基本計画」にのっとり、5年間、今後やっていきます。その後、2020年以降の中期の策定に向けて議論を進めていきたいと思っております。また開催時期につきましては、9月ぐらいを予定させていただけたらと思っております。企画展示も始まるころを想定しながら、また日程調整等をさせていただきたいと思っております。

○山西会長：去年は1回目が11月でしたけれども、来年度は少し早めて9月ごろということですので、それまでにリニューアルオープンについては、皆さん、あらかじめごらんいただくということで、会議に臨ませていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくをお願いします。

それでは、大変拙い進行で、時間を大幅に超過してしまいまして、申しわけありません。

ほかにないようでしたら、これで私のほうからマイクのほうを事務局のほうにお返ししたいと思います。

3 閉 会

○司会（浅見副館長）：皆さん、長時間にわたりまして、どうもありがとうございました。

最後のほうで津屋委員のほうから、いろいろ琵琶湖博物館に期待をいただいている方、お越しいただく方に、あるいは関係の皆さんに寄り添っていくというキーワードを一言いただいたなと思いました。

皆さんからいただくご意見はごもつともですが、私ども、なかなかそれに全て答えることができないもどかしさもございます。とはいえ、やはりこれだけの巨費を投じてリニューアルをしていくわけでありまして、できる限りの対応をしっかりとやって、皆さんに、リニューアルしてよかったなと言ってもらえるように精進してまいりたいと思います。

それでは、これもちまして、本日の琵琶湖博物館協議会を閉会させていただきます。どうもありがとうございました。

[16時53分 閉会]